

12/27(火) 中山

5:00 前・JR 広島駅着～5:20・広島駅構内へ～19:09・松本駅着～20:15・松本駅発
～20:43・穂高駅着～ビジネスイン安曇野着

前日の夜に広島行の夜行バスに天神から乗車。バスでの長旅を終えると、今度は電車の長旅へ。夏合宿で電車旅の恐ろしさを知った身としては、ここからが本番とも思えました。名古屋駅内できしめんを食べたりしつつ、松本駅へ。松本駅の鼻から抜けるような妙なアナウンスを聞くと夏合宿を思い出しました。穂高駅に着くと予約していたホテルに電話し、迎えに来ていただきました。到着後、竹下先輩、古沢先輩、中山は入浴し、先輩方の部屋で明日からの山行での健闘を誓うようにビールで乾杯しました。その後、明日へ備えて就寝しました。

12月28日行動記録 ビジネスホテル～中房温泉 青木
記録

7:30・宮城ゲート着～8:09・トイレ休憩～8:47・9.0km 休憩～
9:33・7.0km 休憩～10:17・5.0km 休憩～11:08・3.0km 休憩～
11:57・1.0km 休憩～12:30・燕岳登山口着

12月28日、朝6時に起床し、朝食をとる。ホテルにわがままを言って、本来7時の朝食時間を6時に早めてもらった。700円払っただけのことはあり、1汁3菜で腹は満たされた。そして、7時10分にタクシーに4人分のザックを荷台に押し込み、宮城ゲートに向かう。ちなみに宮城は「みやぎ」ではなく「みやしろ」と読むらしい。宮城ゲートに到着。ネットで調べた写真と全く同じゲートが目の前に現れる。年末にも関わらず、駐車場にはたくさんの車があり、かなりにぎわっている様子だった。

8時9分に宮城ゲートを出発。ここから中房温泉まで12キロの道のりを黙々と歩くことになる。舗装された道路は思ったより雪は積もっておらず、最初は普通の道路を歩いているような感覚。横に中房温泉までの距離が表示されているので励みになる。最初の3km以外は2kmずつ進んでは、休憩するというペースで着実に歩を進めていく。今回はエッセンがかなり多めということで休憩のたんにエッセンを大量に食べる。途中トンネルや橋、発電所などを通過する。駐車場に車が合ったとはいえ、そこまで登山者はいないだろうと思っていたが、下ってくる、または登ってくる登山客の数は意外にも多かった。私たちのような学生ともすれ違った。かなり歩いて、残り1km地点に到着。この時間になるとかなり日が照ってきたので、各自サングラス、ゴーグルを装着。

約4時間かかりやっとの思いで中房温泉に到着。中房温泉のテニ場には温泉地の地熱の影

響もあり雪は積もっておらず、テントに入り、マットをしくと中々温かかった。せっかく温泉があるということでお金を払い、入浴。お湯の温度は寒いところにいるせい刺すように熱い。それでも、しばらくはお風呂にはれないこともあり、各々ゆっくりとお湯につかった。

その後、晩飯をすませ、明日の山行に備えて就寝した。

12/29(木) 曇りのち雪

5:00・起床～6:30・撤収開始～7:15・出発～8:30・第1ベンチ～9:15・第2ベンチ～10:20・第3ベンチ～11:32・富士見ベンチ～12:30・合戦小屋～14:00・テント設営終了～17:45・夕食～19:55・就寝

5:00 に起床。就寝したときには意外と暖かい、などと考えていたが夜半を回ると背中がどうも冷たく何度も起きていたので起床が待ち遠しかった。寒かったのは使い古した銀マットのせいかもしれない。朝食のかうどんを腹に収め、明るくなるまで出発を待つことにする。6:30 にテント撤収を開始したが、ポールが凍りついていたので接合部を息で溶かしながらの片付けとなった。その際、ポールにわずかな亀裂を発見。恐らくは合宿前から入っていた亀裂を、準備段階で見逃していたのだと思う。テント撤収が終わり、アイスツールをザックにつけ直して重ね着の調整などするが、ややもたつき 7:15 出発。空はどんよりと暗く、天気が悪化しないことを願う。トイレ脇の登山道から入山。道は広葉樹林の中を走っており、思っていたほどではないものの積雪もあった。いよいよ冬山という実感が湧いてくる。しばらくはツボ足で登ったが、当然ながらかなり歩きづらくすぐにアイゼン装着。これで足下はかなり良くなったが、いかんせん荷物が重い上にかさばっているのので 30～40 分に 1 度くらいの頻度で休憩を取りながら登った。トレースは明瞭でよく整備された人気ルートであることを感じさせる。アイゼンを付けているので時折露出している岩や木の階段に注意して進む。途中、中山がアイゼンを引っ掛けて転倒するが怪我はなし。また、赤旗が枝に引っかかって竹下はかなり歩きづらそうだった。これは赤旗の長さの設計(150cm 程度)に問題があったと思うので、次回以降の参考にしたい。天気は、第1ベンチを過ぎた頃には陽も高くなり、やや雲はあるが概ね晴れてきたが、第2ベンチを過ぎたあたりからまた曇ってきて雪が降り始めた。九州の雪と違って乾燥していたので衣服やザックが濡れることはなかったが、体温で解けては困るので休憩のたびにほいたり息で吹いたりして雪を払い落した。またこの頃にはガスで展望のきかない樹林帯の風景にも飽きてきて、荷物やアイゼン歩行に気を払っているせいでぐんぐん進めないこともあり、精神的に疲れてきていた。小屋泊まりであろう身軽な人々に追い抜かされるのもそれに追い討ちをかけた(道を譲るために脇へ避けると膝上まで雪にはまるのだから、煩わしいことこの上ない)。第

3 ベンチ、富士見ベンチ(案の定展望はきかなかった)を過ぎてようやく 12:30 合戦小屋到着。行動としては 5 時間強と長いものではないが、どんよりとした天気の中、単調に登り続けるのが退屈であった。小屋の周りは、途中に行きあった登山者の話通り例年(インターネット上の山行記録)よりも 1~1.5m ほど積雪が少なめ。小屋の周りを見て、テント設営場所を決定、整地を始める。古澤は千葉出身なので一応雪かきの経験はあったが、他の 3 人は九州出身なので雪かきという行為自体初めてのようだった。防風壁も作ろうと試みたが、雪質がかなりくっつきづらいもので、なかなか思うようにはいかず、とりあえず申し訳程度に雪を盛り上げて壁を作った。整地を終えてテント設営に入ったが、ポール取り付けの際にポールが折れた。前述の亀裂と、凍結による柔軟性の低下が原因だと思われる。修復しようとビニールテープを持ち出すが、こちらも凍結して粘着力がほとんどない。破損部がフライを破かないようテープを無理矢理巻き付け、細引きで無傷のポールに固定してなんとかテントらしい形に仕上げた。テントに入ったのが 14:00 過ぎなので 1 時間半近く設営に格闘していたことになる。テントに入ってから竹下提供のお汁粉など嗜好品で暖を取り、水作りの後、16 時から気象通報を聞いて天気図を描いた。電波状況は中房よりもかなり良く、はっきりと音声聞こえた。その後ペミカンカレーを作るが、ややとろみが足りなかったものの味に問題はなし。きちんと吸水させたためか、心配していた米の炊け具合もまずまずだった。食後、ポールの破損を考慮して、テントは合戦小屋に据え置きで、明日明後日は燕岳、大天井岳を合戦小屋起点として目指すこととした(行動時間によっては小屋素泊まりも視野に入れる)。19:55 就寝。背中はやはり冷たかった。(古澤)

12/30(金) 中山

5:06・起床~7:30 頃・出発~8:30・合戦ノ頭~9:30 頃・燕山荘着~10:30・燕山荘発
~10:52・ゴーグル装着~11:11・燕岳着~11:25・燕岳発~11:56・燕山荘着
~12:30・燕山荘発~13:21・合戦小屋着~16:00・気象通報~18:40・就寝

前日にテントのポールが折れてしまったため、合戦小屋からの燕岳ピストンを開始することに。合戦小屋からはいきなりの雪斜面でした。雪が多くラッセルしながらの前身となりました。一年生かつ九州人の中山は人生初の量の雪に悪戦苦闘しました。最初はアイゼンをはいていましたが、雪の深さからワカンの装着を決定。脇道にスペースをつくってそこでワカンを装着しました。キックステップを駆使して進んでいくと燕山荘へと続く尾根に出て、そこから尾根に沿って進んでいきました。左右は雪で覆われた急斜面。周りの雄大な風景をみるのもほどほどにしないと、と自分に言い聞かせて慎重に足元を見て進んでいきました。燕山荘に着くとひとまず山荘の飲み物を飲みながらエッセンを食べて休憩。いよいよ燕岳に出発。途中太陽光が強くなってきたのでゴーグルを装着。燕岳への道は雪

だけではなく岩がでていたりしており、アイゼンをひっかけるようにして慎重に進みました。最後の岩だらけの道を登っていくと、ついに燕岳山頂到着。皆で握手を交わした後、しばし景色を見て感慨にふけていました。雲が多く、見えないと思われた槍ヶ岳でしたが、雲が晴れ、山頂が顔をのぞかせていたのは感激でした。その後、来た道に戻って燕山荘へ着。少し休んで、合戦小屋まで戻りました。次の日は大天井岳ピストンの日。無事登れるかどうか不安を感じながら就寝しました。

12月31日行動記録【合戦ノ小屋～蛙岩～中房温泉】*大天井岳往復予定日 (時間記録)

今日は大天井岳往復の予定日。地図上でも燕山荘から大天井岳までの稜線は非常に長いことが分かっていた上に、テントを燕山荘のテント場に上げられなかったため、出発を5時と通常より2時間近く早めた。4時起床し、朝食をとる。朝食は棒ラーメンに餅を入れた力ラーメン。昨夜の予定ではラーメンの具の素を入れるという話だったが、入れ忘れる。こういった細かなミスが今合宿では多く見られたような気がするが…。無理矢理棒ラーメンを腹に収め、5時前テントの外に出る。移動距離が長いことを考えて、装備はツェルトや非常缶など必要最低限に抑えた。今回の合宿期間中で最も軽い荷物であったろう。外に出ると周りのテントにも灯りがついており、入口付近でござそしている人の姿も見かけたが、出発する気配はない。我々がうるさく準備した気もしないので、単に早起きなのだろう。雪は昨日と比べ、全くと言っていいほど積もっておらず、小屋の上方の斜面にはしっかりとトレースが残っていた。各自荷物をテントの外に出し、アイゼンを装着する。寒さのためにアイゼンのバンドが半分凍ったようになり、うまく詰め付けることが出来ない。なんとか準備を済ませ、出発。辺りはまだ薄暗いため、ヘッドライトを付けて歩く。トレースのなんと有難いことかと思えるほど、ぐんぐん足が進む。合戦ノ頭を過ぎて燕山荘を見上げるが、暗さのために良く見えない。時折、燕岳の方に明かりが見えたが、えらい早く登る人がいるのだろう。合戦ノ尾根上に出るとさらにスピードを上げて歩くことができた。薄暗さのために妙な恐怖感が時折体を襲う。ふと足元が無くなるような感覚になる。燕山荘までの最後の登りという所で徐々に明るくなってくる。今年最後の日の出だ。6時半過ぎ、燕山荘に着くとたくさんの方が出発準備やら、日の出の写真を撮るためにうろうろしていた。山荘前のベンチでコーヒーを飲みながら日の出を迎える。7時半前大天井岳に向かって出発。稜線にはトレースが付いており、道に迷うことはない。小さなアップダウンを繰り返し、蛙岩へ到着する。事前の調べでも雪の状態によってはザイルが必要となるポイントだと分かっていたため、竹下がルートへの偵察に向かう。稜線の西側は崖になっており、明らかに通れない。東側には岩の上に雪の塊が牡丹餅のように付いており、トレースがあっ

たが、その雪の牡丹餅の岩との境界であろう場所にうっすらひびが入っていたため、通ることは憚られた。ちょうど蛙岩の中央の岩にうっすらと冬ルートと赤字で書かれているのを1年生が見つかる。確かに、岩でできた通路のようなものがまっすぐ蛙岩を貫いていた。通路の手前まで上がって中を覗くと、足もとが2~3m空いており、右手の岩に5cmほどのバンドがあった。そのバンドに足を置き、向こう側の岩へ足もとの空洞をまたぐようにしていけば通れるだろうと分かった。しかし、岩稜をアイゼン歩行する訓練をしていない1年生を無事通すことができるだろうかと竹下は考えた。空荷、登山靴であれば行けるだろう。ただ、至る所に雪が付いており、しかもその雪の下に岩があるかどうか分からない状態であった。再び稜線の東側、雪の牡丹餅ルートを検討しに下りてきた竹下と入れ替わるように古澤が岩の通路の状態を見に行く。空洞をまたぎ、通路の奥に進んでいく。姿が見えなくなってからしばらくして通路の向こうに道が続いているとの報告があった。戻ってきた古澤と1年生を集め、竹下が撤退を決定すると告げる。理由はアイゼン歩行に確信が持てないこと、ザイル等の装備がないため万が一の場合に対処出来ないこと、初めての冬山のため無理は出来ないということなどが挙げられた。8時半前蛙岩を前に撤退を始める。ルート検討の際に若い男女の2人組が同じようにルート検討し、撤退をしていた。また、男性1人が東側の牡丹餅のトレースを辿っていった。燕山荘へ出発する間際、男性1人が岩の通路に入っていった。燕山荘到着後、山荘内で休憩をとり、合戦ノ小屋へ下る。蛙岩から山荘までの道程で、これからの動きを決めた。予定では合戦ノ小屋で年越しをする予定であったが、1日下山ということは変わらないため、今日の内に中房温泉まで下りてしまおうということになった。合戦ノ尾根を下る際も、小屋についた際も、登りの登山者で一杯であった。大勢の人たちの中、壊れたテントを撤収する。ペグを埋めた雪が凍ってしまい、掘り起こすのに苦労した。なんとかそれぞれパッキングを済ませ、下山開始。途中ツアー客であろう40名近くの登山者とすれ違ったり、道を譲ろうとして腰まで埋まったりなどして(主に竹下であったが)、早いペースで中房温泉まで下っていく。第三ベンチあたりからすれ違う登山者もまばらになる。登りとは違い、雪も降らず、風も吹かず、日が射しているため、暑い。中房温泉が見え始めた頃に竹下がアイゼンをズボンに引っ掛け転倒。1年の頃から下界が見えるところける癖は抜けていないらしい。古澤も途中で一度こける。やはり背負っている荷物の量の差が歩きにも影響しているようだ。1時半ごろ中房温泉到着。近くに湯気が上がっているところが暖かいだろう(ここは地熱があるらしい)と駐車場にテントを張る。大晦日であり、無事下山したということもあり、昼食を食べることに。昼食は予備食として用意していたカレーライス。カレーを準備する間、手持無沙汰なので竹下が持参したカルパスをつまみにビールを飲む。他の者は嗜好品として飲み物しか持ってきていなかった。冷えてきたためテントに入り、ラジオをいじったりしながら米が炊けるのを待った。カレーができた頃にはビールも無くなっていた。昼食のあとはラジオを聞いたり、他愛もない話(ジブリの話、お化けの話、映画の話、音楽の話、合宿の話などなど)をしたりしながらカフェオレやコーヒーを飲む。8時頃になり、夕食としてトマト雑炊という新メニ

ューを食べる。非常においしく、中山のお気に入りとなったようだった。買って来た梅酒を飲みながら年越しを待つ。11時半ごろから青木、竹下がうつらうつらし始め、気付いたころには新年を迎えて数十秒経っていた。年越しそばを食べることもなく(古澤、中山は食べたのだろうか)すぐにシュラフに潜り込む。荷物は外にまとめてあるため、テント内は広々として快適だ。しかも地熱のため、なんだか床も暖かい。こうして今年1年間の山岳部の活動が終わった。

1月1日行動記録 中房～姫路駅 青木

記録

7:46・中房温泉発～8:10・休憩～8:36・信濃坂～8:46・発電所？休憩～
9:13・6.0km 休憩～9:40・8.0km 休憩～10:30・宮城ゲート着
～11:00・穂高駅着～11:47・松本駅着～15:35・松本駅発～23:00?・姫路着

1月1日、新年なのに山頂でも実家でもなく中房温泉。愛しき我が家を目指し、テントを撤収し出発。空は曇っており、もしかしたら山頂では初日の出はきれいに見えなかったかもしれない。

行きと全く同じ道を下っていく。行きと同様に2kmおきに休憩をいれ、宮城ゲートをめざす。既に歩いた道ということもあり、脇道にそれてショートカットを試してみたりした。これは果たして近道になっているのかと疑問になる険しい脇道も途中にあった。道には動物の糞と思われるものが多くあり、踏んでしまいそうで恐ろしかった。黙々と歩いていた隊は帰りたいたいという気持ちがでてきたのか、早歩きから小走りへと段々スピードアップしていき、いつのまにかジョギングほどのペースで進んでいた。そのうち雪上でのマラソン大会に。8km～はおそらくほとんどが小走りだった。道路が凍結していたこともあり、こけないようにできるだけ雪の上のコースを走る。糞も多くあったので、踏まないようにするのが大変だった。宮城ゲートまであと少しほどの距離になると冬にもかかわらず汗でびしょりになっていた。荷物も重かったこともあり、一番このときがきつかったかもしれない。そして、宮城ゲートに到着。ゲートの前にて最後に隊全員で記念撮影をした。

穂高駅へ向かうため、タクシーを呼ぶ。タクシーの運転手さんは行きにホテルから宮城ゲートまで送ってくれた方と一緒にだった。運転手さんは我々のことは覚えていなかったようで、行きと同じ内容のことを車内で話していた。そして、穂高駅着。新年というのに外出しているひが多く、穂高駅は混み合っていた。案の定、電車に乗ると人がかなり多かった。冬合宿を思い返しながら、松本駅

へ向かう。そして、松本駅着。待望の温泉へ。今合宿でも夏合宿と同じ銭湯へ向かう。新年から営業していた。ありがたい。何日かぶりの風呂だったので、何回も体をアカスリのように洗う。汚れを落としてすっきりした後、腹を満たしに銭湯近くの「豚さん食堂」へ。「豚さん食堂」の洗脳ソングを聞きながら、コーラで乾杯し、豚料理に舌鼓を打った。うまい。食後、竹下先輩と中山はゲームセンターでシューティングゲームをプレイ。青木と古澤先輩は見学。ゲームを終え、TUTAYA で暇つぶし用の本を買い、松本駅にもどる。中津川行きの電車に乗り込み。ここで千葉の実家に直接帰る古澤先輩とはお別れ。この日は大阪までと考えていたが、姫路まで行けるということになり、何回か乗り換えて、姫路へ。宮本先輩に調べてもらった（ありがとうございます）ネットカフェに竹下先輩・中山・青木の3人で入り、明日の始発まで時間をつぶす。

1月2日行動記録 姫路～博多 青木

記録

5:28・姫路発～6:51・岡山～14:21・下関～14:36・小倉～16:02・博多着

早朝、始発に乗るためまだ暗い姫路のまちを駅目指して歩いていく。途中、コンビニで朝食を買う。電車に乗車。岡山までは良かったが、岡山～下関までは普通列車を約7時間、乗り換えなしで乗らなければならなかったもので、ほぼ苦行。ネットカフェでは一晩中寝なかったもので、寝ればすぐに時間は過ぎると思ったが、あまり寝ることができない。(中山だけは爆睡)7時間も乗っていると車内が混雑する区間もあり、竹下先輩はトイレに行くのに苦労していたようだった。7時間もの間、電車に乗っているとなんだか電車と一体になりそうだと誰かがもらしていた。かなり体力を削られ、下関に到着。ここからは博多まで少しだということで、自然と元氣もわいてきた。一駅、一駅博多に近づいていくのを感じながら到着のときを待つ。そして、やっとの思いで博多に到着。大人になってお金をたっくさん稼いで、新幹線にのれるようになりたいものだとしみじみと思った。